

平安京左京五条三坊十一町跡

平安京左京五条三坊十一町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京五条三坊十一町跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび事務所ビル建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

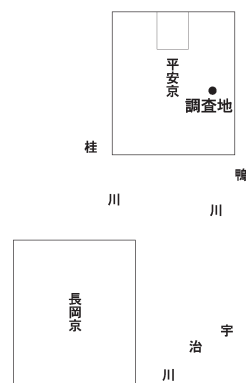
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 19 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|-----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 平安京左京五条三坊十一町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区仏光寺通室町東入釘隠町 247 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 光栄 代表取締役 松原健二 |
| 4 調査期間 | 2007年7月2日～2007年8月10日 |
| 5 調査面積 | 105 m ² |
| 6 調査担当者 | 伊藤 潔 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生・三条大橋・島原・五条大橋」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 挿図順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 自然遺物分析 | 竜子正彦 |
| 17 本書作成 | 伊藤 潔 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	1
3. 遺 構	4
(1) 層序と遺構の概要	4
(2) 第1面の遺構	4
(3) 第2面の遺構	6
(4) 第3面の遺構	6
(5) 第4面の遺構	6
4. 遺 物	8
(1) 土器類	8
(2) 瓦類	11
(3) 自然遺物	12
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第2面全景（南から）
		2	第3面全景（南から）
図版2	遺構	1	第4面全景（南から）
		2	北壁断面（南から）
図版3	遺構	1	SK27（北から）
		2	SK55（南から）
		3	SD171（南から）
図版4	遺物		出土土器
図版5	遺物		出土軒丸瓦

挿 図 目 次

図1	四行八門および調査区配置図（1：1,500）	2
図2	調査地および周辺の調査位置図（1：5,000）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	作業風景（北から）	3
図5	調査区北壁断面図（1：50）	4
図6	第1～3面遺構平面図（1：150）	5
図7	SK27実測図（1：40）	6
図8	第4面遺構平面図（1：100）	7
図9	SD171実測図（1：50）	7
図10	SK55出土土器実測図（1：4）	9
図11	SD171出土土器実測図（1：4）	9
図12	弥生土器実測図（1：4）	10
図13	軒丸瓦拓影・実測図（1：4）	11
図14	自然遺物顕微鏡写真	12

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	10
表3	自然遺物リスト	12

平安京左京五条三坊十一町跡

1. 調査経過

京都市下京区仏光寺通室町東入釘隠町で、事務所ビルの建設が計画され、京都市文化財保護課が試掘調査を実施したところ、試掘北調査区で11世紀前半から16世紀にかけての遺構が複雑に切り合っている状況を確認した。そのため、京都市文化財保護課より発掘調査の指導がなされた結果、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、発掘調査を行うこととなった。

調査は京都市文化財保護課の指導により、敷地北半部に東西7m、南北15mの調査区を設定し、江戸時代後期の遺構上面まで重機掘削し、これ以下を人力で掘削して行った。

調査の節目ごとに京都市文化財保護課の確認を受け、その指導の下に調査を進めた。

2. 位置と環境

調査地は平安京の条坊では北側を五条坊門小路、西側を室町小路、南側を高辻小路、東側を烏丸小路に四方を画された左京五条三坊十一町の中央部北半にあたる。また、1町内を区分する「四行八門制」では、十一町内の「西二・三行北一・二門」の四戸主分に該当する。同町に関連する平安時代の文献資料は不明確であり、特定の邸宅や諸施設の存在は推定されていない。しかし、平安時代中期から後期になると隣接地には、藤原頼忠邸・四条宮（一町）、菅原道真邸「紅梅殿」（二町）、「白梅殿」（三町）、藤原親隆邸（九町）、藤原忠平邸の西五条第（十六町）などの貴族の邸宅があいついで営まれていたことが、記録に残っている。中世には、下の町の一角を占め、以降も各時代を通じて都市域の中心地となっている。また、当地は弥生時代から古墳時代の集落跡である烏丸綾小路遺跡の範囲内に含まれる。

現在の左京五条三坊の地は、京都市内でも有数のビジネス街の一角であり、開発行為も非常に多い地域の一つである。しかし、既存の建物の基礎により攪乱を受けているため、発掘調査の件数はそれほど多くない。その反面、試掘・立会調査の件数は膨大な件数に達している。試掘、立会調査では、明確な遺構の検出は少ないが、弥生時代から江戸時代に至る遺物包含層を各所で検出している。

当十一町では、発掘調査1件、試掘調査、立会調査が8件ある。京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した発掘調査（図2-1）では、北六門と七門を区画する推定ライン付近に10世紀後半の溝、北五門と六門を区画する推定ライン上で鎌倉時代の柵が検出されている。調査地西隣の立会調査（図2-2）では6世紀後半の須恵器短頸壺の完形品が出土している。

五町内では1980～81年に実施した成徳中学校（図2-3）の発掘調査で、平安時代前期から後期にかけての井戸・土坑などが検出され、多量の土器、陶磁器類が出土した。鎌倉・室町時代

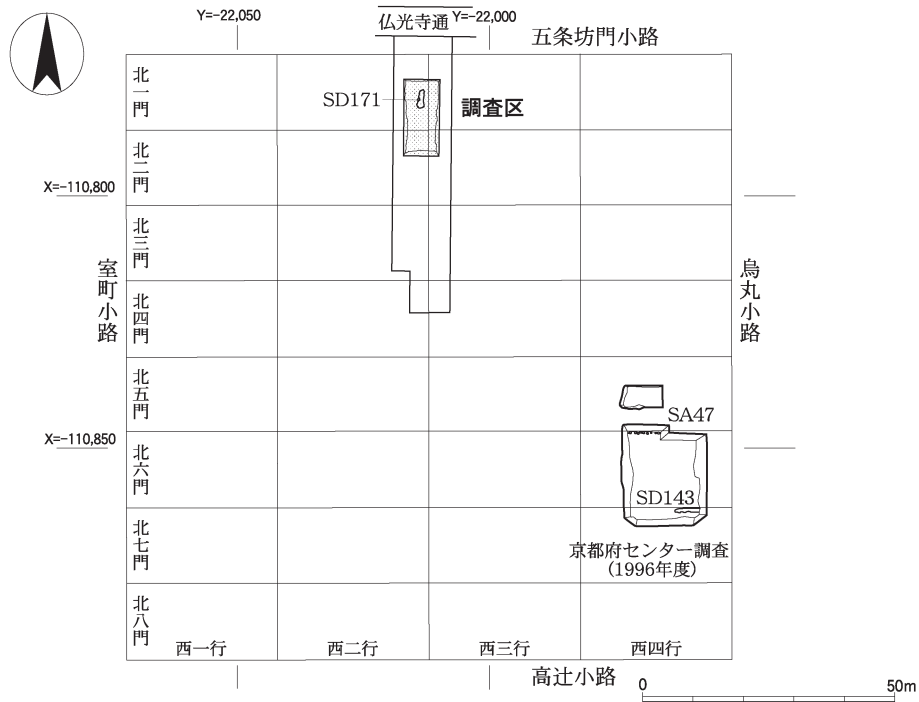


図1 四行八門および調査区配置図 (1 : 1,500)



図2 調査地および周辺の調査位置図 (1 : 5,000)



図3 調査前全景（南から）



図4 作業風景（北から）

の遺構としても、井戸・土坑・墓などが検出されている。

八町では、池坊学園内で発掘・立会調査が数件行われている（図2-4）。平安時代から江戸時代までの各時期の井戸・土坑などが検出されているが、室町時代の土取り土坑によって破壊されている。下層では、弥生時代中期の溝・流路が検出されている。

九町内では、北西部の立会調査（図2-5）で、綾小路北側溝・溝・土坑・井戸が検出されている。

十町内は、からすま京都ホテル（図2-6）の発掘調査で、平安時代前期から後期の井戸・土坑・柱穴跡や、鎌倉時代から室町時代の井戸・土坑・溝・柵などが検出されている。西半部の調査（図2-7）では、平安時代後期の園池の洲浜の一部が検出されている。

十三町内では、京都市営地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査（図2-8）で、平安時代後期の井戸・土坑などが検出されている。また、（図2-9）では、平安時代後期の井戸や室町時代の高辻小路南側溝が検出され、下層では古墳時代の流路跡も認められた。

十四町内では、烏丸線No.49地点の発掘調査（図2-10）で、平安時代前期・中期の土坑および平安時代後期から末期の土坑群や柱穴群が重複して検出されている。

十五町内の京都市営地下鉄烏丸線建設に伴う発掘調査（図2-11）では、平安時代中期の井戸、平安時代後期から鎌倉時代の土坑・柱穴が多数検出されている。また、下層では、弥生時代後期の竪穴住居が検出された。

十六町内では、中心部で発掘調査（図2-12）が実施されたが、大半が江戸時代前期に属する土採取土坑・ごみ捨て穴であり、古い遺構は破壊され、江戸時代の遺構の隙間に深い遺構だけが残っている状況であった。中世の終わりから近世にかけての土地利用の一端が明らかになった。

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

層序 調査地の基本層序は幕末以降の盛土（1m）、第1層黄灰色砂泥（図5-2層、0.2m）、第2層暗灰黄色泥砂（同8層、0.1～0.15m）、第3層オリーブ灰色泥砂（同15層、0.2m）、第4層オリーブ褐色シルト（同23層、0.25m）、第5層にぶい黄褐色粘質土（同25層、0.05～0.1m）、オリーブ褐色砂質土の地山となる。

遺構の概要 第1層の上面を第1面、第2層の上面を第2面、第3層の上面を第3面、第4層の上面を第4面とした。第1面は江戸時代後期、第2面は桃山時代から江戸時代中期、第3面は室町時代、第4面は平安時代の遺構が主体をなす。

以下各面の主な遺構について述べる。

(2) 第1面の遺構（図6）

SK15 径1.3mの掘形に、拳大から人頭大の河原石を円形に積んだ石組み遺構である。深さは0.65mを測る。

SA1 調査区東半部で検出した南北方向の礎石列である。長軸が0.2mほどの河原石の平坦面を上にして、約0.5m間隔で並ぶ。

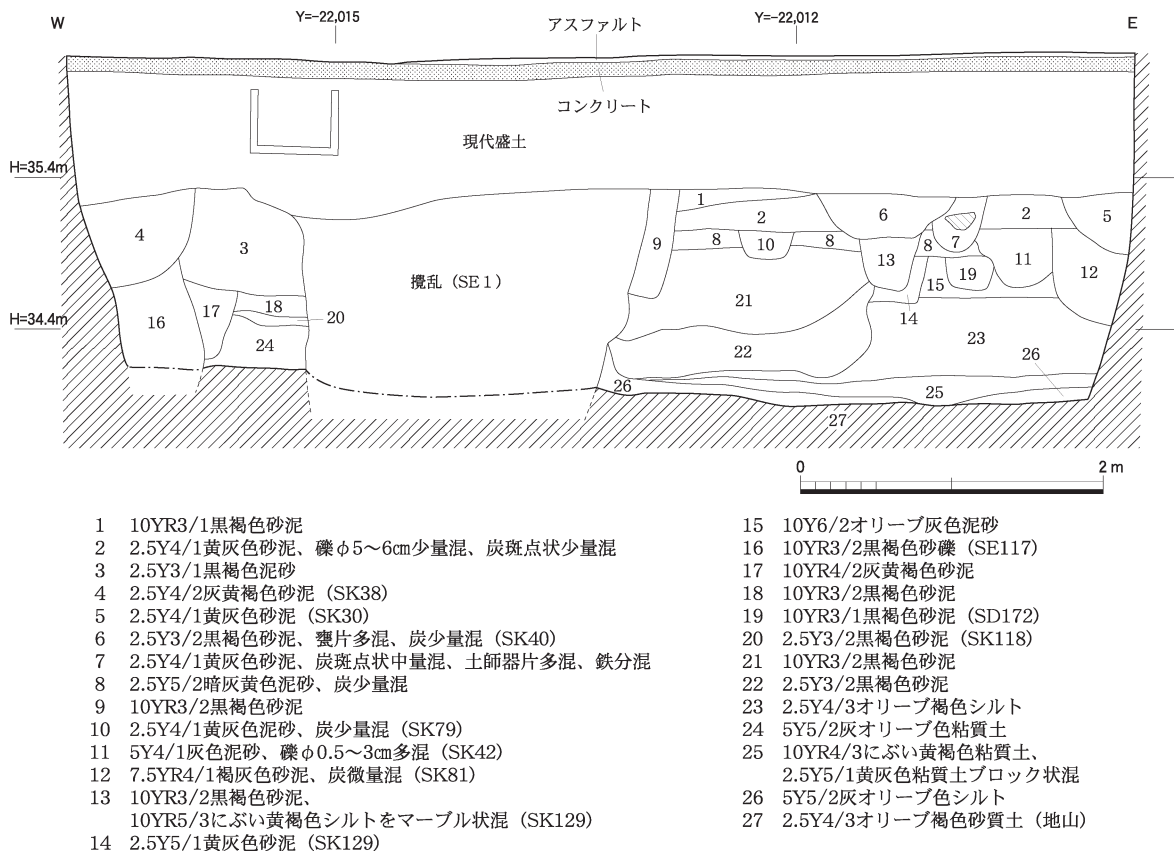


図5 調査区北壁断面図（1：50）

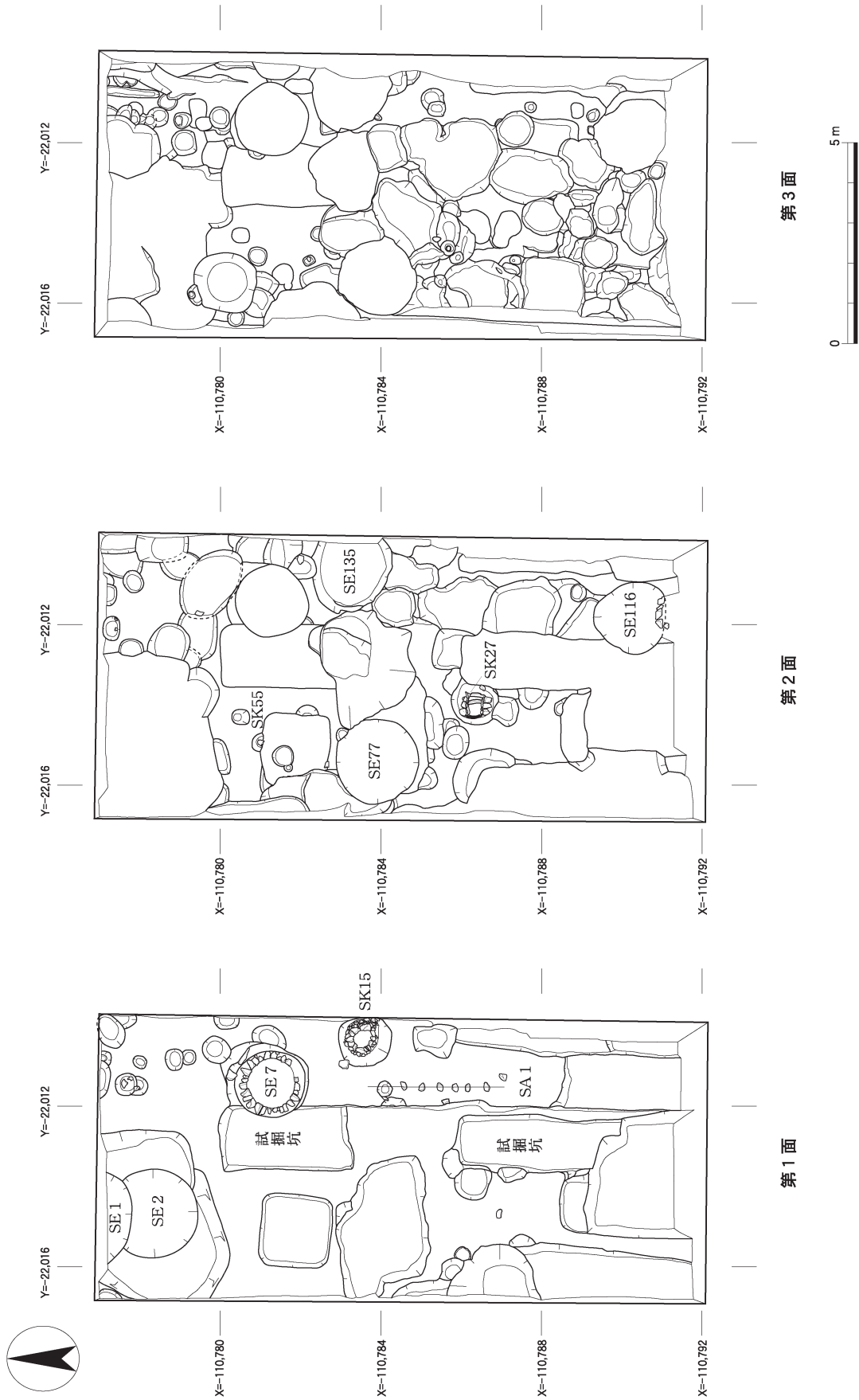


图6 第1~3面遺構平面图(1:150)

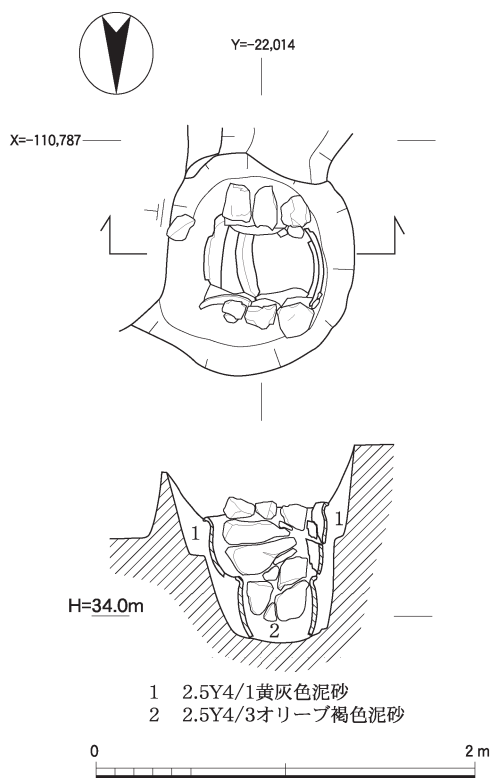


図7 SK27 実測図 (1 : 40)

(3) 第2面の遺構 (図6、図版1)

SK55 (図版3) 土器埋納遺構である。長軸 0.45m、短軸 0.4m、深さ 0.63m の隅丸方形を呈する。埋土はオリーブ褐色砂泥で焼土、炭を含む。17世紀代の土師器皿大 17枚、皿小 15枚の完形品が重なった状態で出土した。他に炭化したオオムギが 173粒出土した。

SK27 (図7、図版3) 径 1.2m の掘形に、上段 0.6m × 0.4m、下段 0.4m × 0.4m の方形、深さ 0.63m の便槽が設けられている。便槽の側壁は、径 0.7m の甕を 4分し、東西に 2段ずつ据え、南北には、河原石の小口面を内側に向け、丁寧に 6段積み上げた構造をもつ。埋土は、オリーブ褐色砂泥で汲み取り式トイレ遺構と考えられる。甕内部には、無機質カルシウムが厚く付着している。

(4) 第3面の遺構 (図6、図版1)

調査地南半 (X=-110,783以南) は、室町時代後半の土取り土坑が、複雑に重なり合っている。北半では、鎌倉時代から室町時代後半の遺物を含む土坑などが、わずかに認められる。

(5) 第4面の遺構 (図8、図版2)

SD171 (図9、図版3) 調査区北半で検出した、幅 1.21m、深さ 0.46m の南北方向の溝である。1町の東西の中心より、わずかに西寄りに位置する。埋土は 4層に分層でき、11世紀初めの遺物が出土した。溝の南半は土取り土坑群により、削平を受ける。

第5層は調査区の北東の一部で検出した、弥生時代の遺物包含層である。前期から中期の遺物

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	井戸、土坑、トイレ遺構、土器埋納遺構など	
室町時代	土坑、土取り穴など	
平安時代	溝、土坑	
弥生時代	遺物包含層	

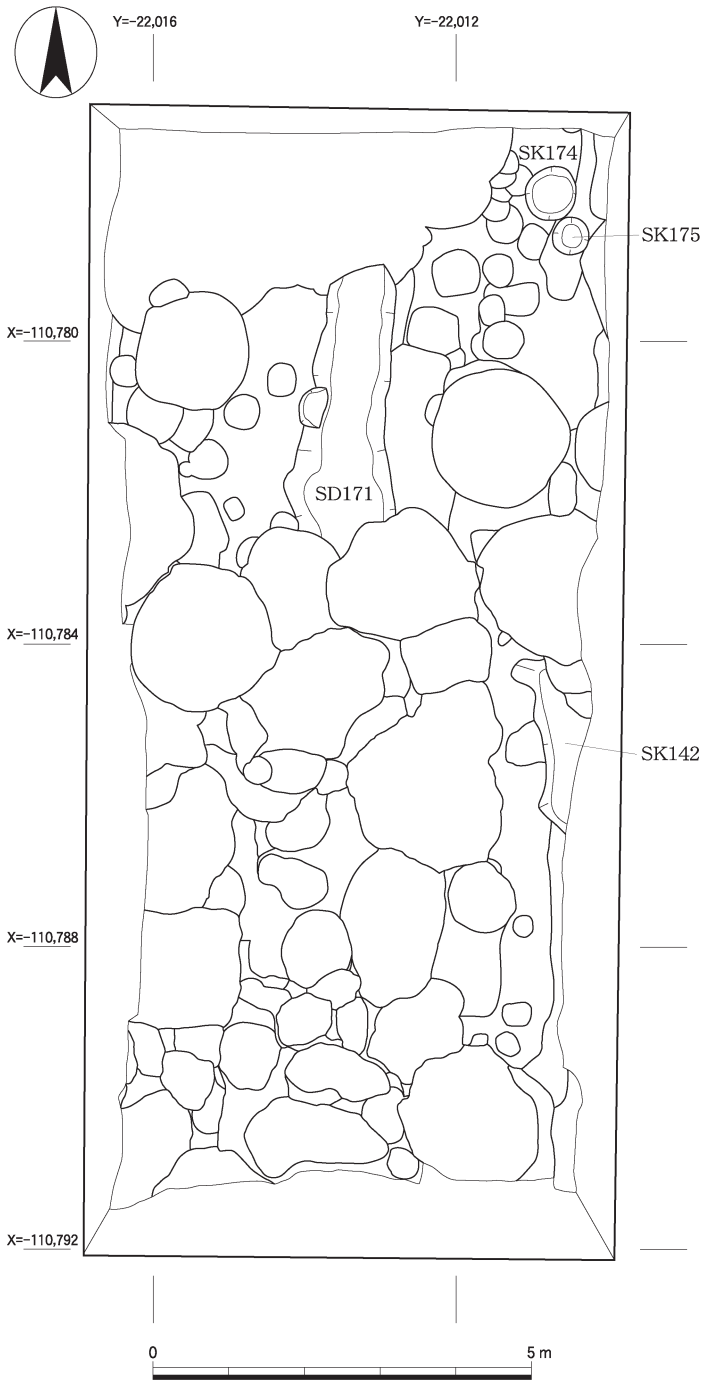


図8 第4面遺構平面図 (1 : 100)

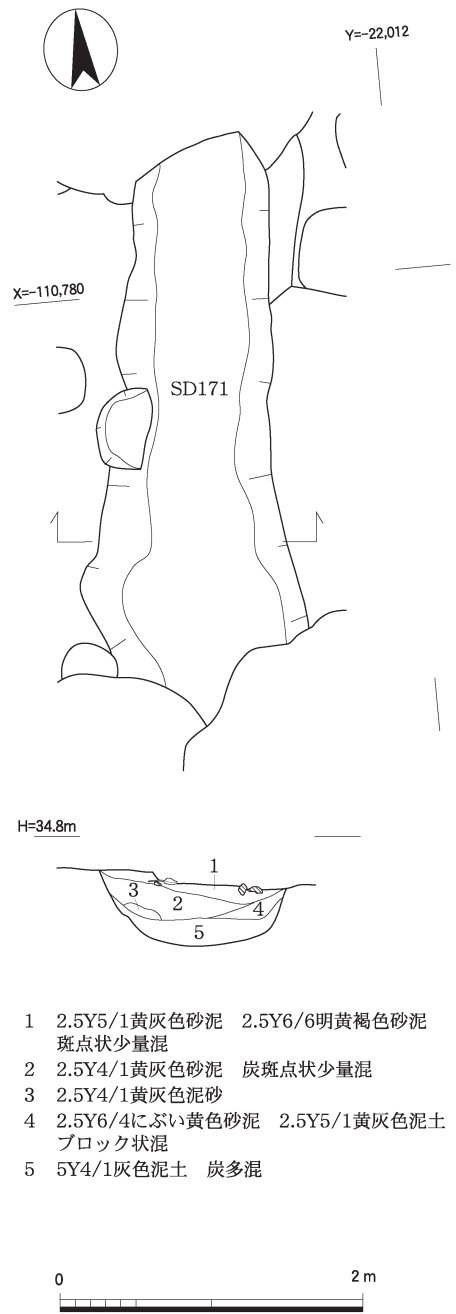


図9 SD171 実測図 (1 : 50)

が少量出土した。地山上面では、弥生時代の遺構は検出していない。

4. 遺物

遺物は整理箱に28箱出土した。遺物の時期は、弥生時代から江戸時代に及ぶが、量的には室町時代に属するものが多い。

江戸時代の遺物は、整地層および井戸、土器埋納土坑などから多く出土した。土器類・瓦類・金属製品・石製品などがある。土器類は、日常雑器が中心で、土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付などがある。金属製品は鉄釘や銅銭が10数枚ある。石製品には石臼の破片がある。

室町時代の遺物には、土器類・金属製品がある。土器類には、土師器・瓦器・輸入陶磁器・焼締陶器・施釉陶器などがあり、江戸時代と同様、日常生活に用いたものがほとんどで、土坑・土取り穴から出土した。

鎌倉時代の遺物は土器類が、土坑や後世の遺構から少量出土した。

平安時代の遺物には、土器類・瓦類がある。土器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・黒色土器・輸入陶磁器がある。主としてSD171から出土した。後世の遺構の埋土から出土しているものも多い。SD171から出土した土器類は、11世紀初頭のまとまった土器群である。

弥生時代の遺物は、調査区北東部で検出した遺物包含層および後世の遺構から、前期から中期に属する壺・甕・鉢の小片が少量出土した。

(1) 土器類

SK55 出土土器 (1～32) (図10、図版4)

1～15は土師器皿Sb(丸底小皿)である。口径9.5～10.0cmで、器高は2.1cm前後が主である。口縁端部の処理は、丸味をもつものと、端面をもつものがある。16～32は皿S大2である。口径12.5～13.2cmで器高は2.2cm前後である。内面の立ち上がり部分の凹線状圏線は明瞭である。口縁端部の処理は、皿Sbと同様に丸味をもつものと、端面をもつものがある。口縁端部に煤が1～3箇所付着しているものがある。皿S・皿Sbの胎土は本来の白色を呈するものはほとんどなく、皿Sは浅黄橙色、皿Sbはにぶい黄橙色を呈するものが多い。

SD171 出土土器 (33～78) (図11、図版4)

33～59は土師器。33～48は皿A。口径9.8～11.0cmであるが、10.5cm前後のものが主体である。器高は1.1～1.3cm前後のものが多く、1.8cm程度の深いものもある。口縁部は内弯気味で強く屈曲し、端部は立ち上がる。49～55は杯・皿N。口縁部は底部から緩やかに屈曲して開き、端部は外反する。体部上端から口縁部外面の形態は、ナデによる2段の凹みを持つ。口径14.0～16.8cm、器高2.5～3.6cmである。56は平らな底部に外方に開く台が付く台付盤か。57・58は小型甕。57は口縁部が屈曲して外反し、端部はやや肥厚する。58は口縁端部をつまみ上げる。59は羽釜。口縁端部をやや下がった位置に鍔がつく。外面は粗いタテ位のハケ、内面はナデ調整を施す。摂津地方の製品か。やや古相である。

60～66は灰釉陶器。61～63の椀は、体部が張り口縁部は丸くおさめ、やや高い付高台をもつ。60は深めの椀で、口縁部が外反し体部の張りがゆるやかで三角形に近い断面形状の高台をも

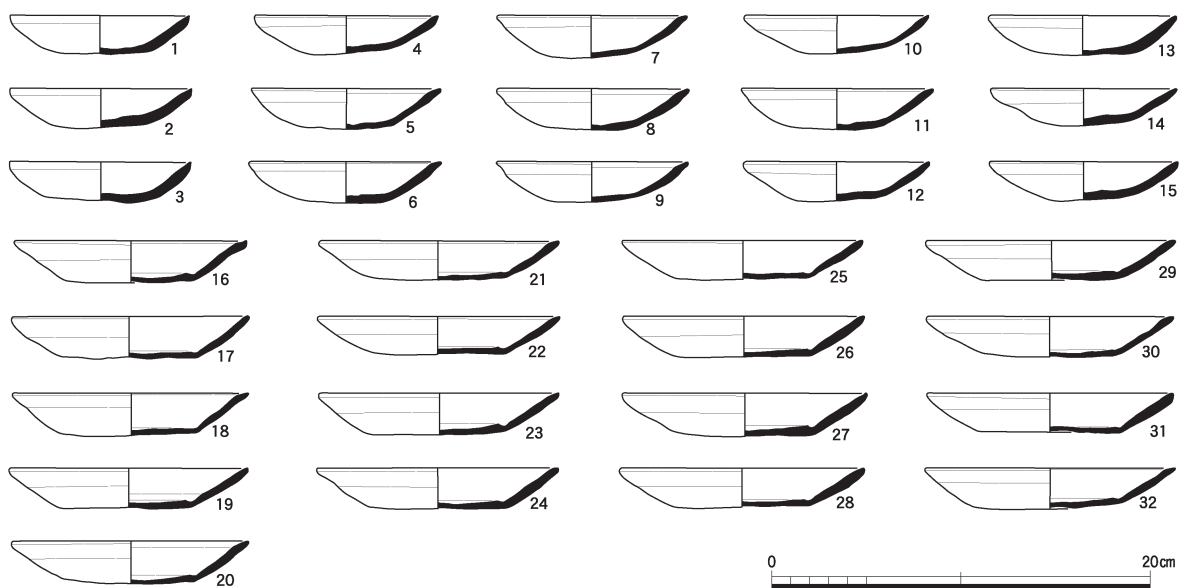


图 10 SK55 出土土器实测图 (1 : 4)

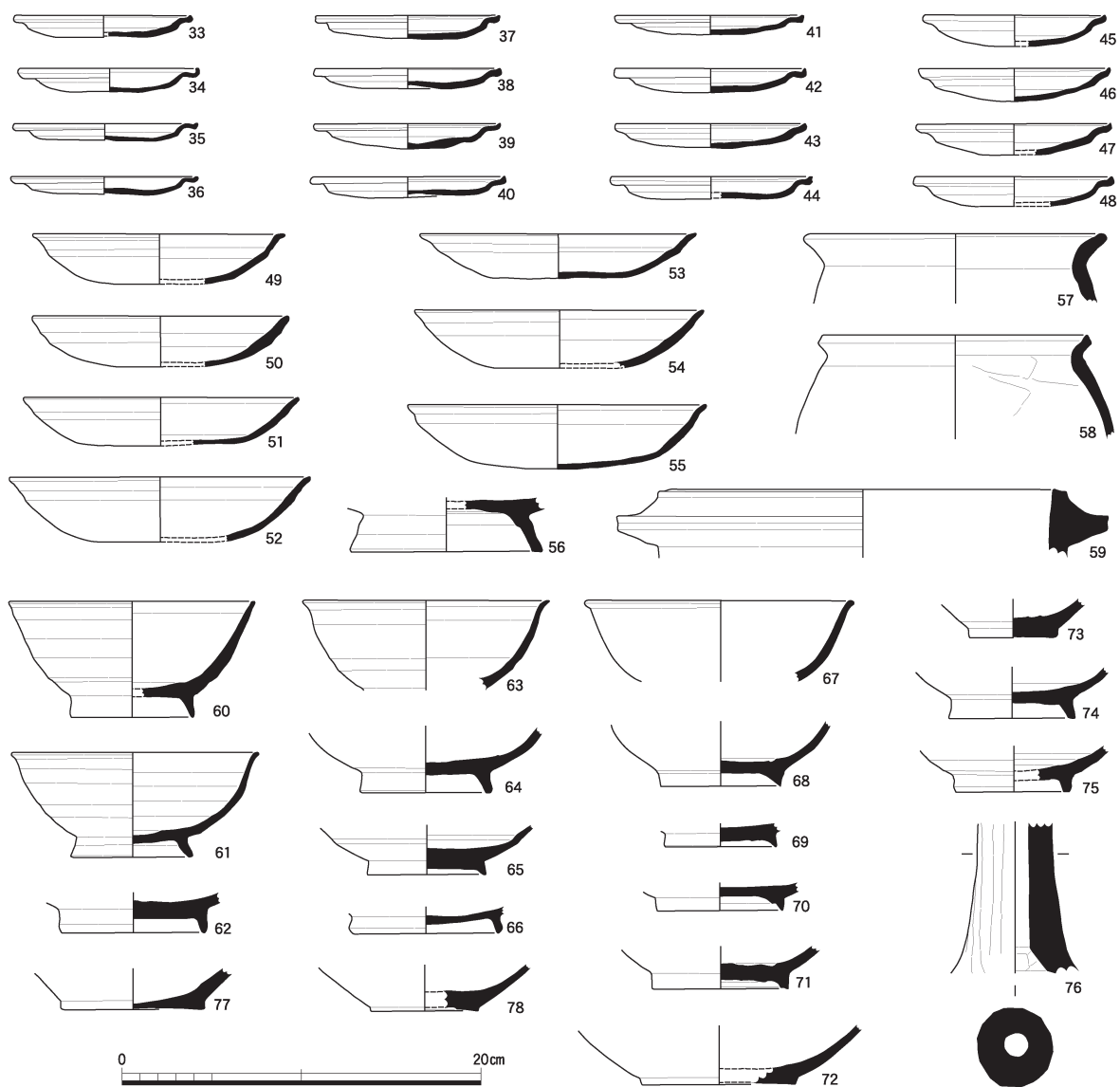
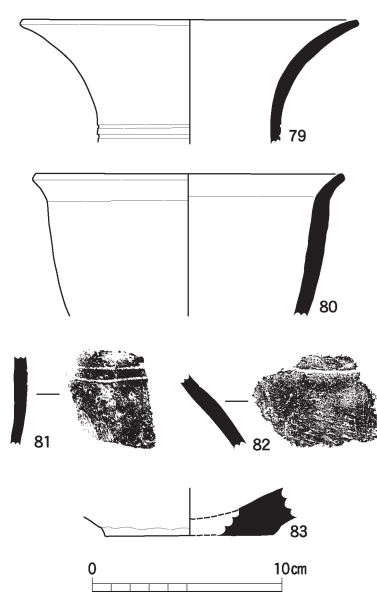


图 11 SD171 出土土器实测图 (1 : 4)

つ。64は稜皿で、体部内面には稜があるものの、体部外面には明瞭な屈曲が認められない。底部は糸切で断面三角形の高台を付す。

67～72は緑釉陶器。67～70は灰白色から淡橙色のやや軟質の素地に緑色の釉薬を施す。ヘラミガキは施されず、底部の糸切痕は調整しない。68は底部内面に一条の凹線が巡り、トチンの痕跡。68～70は底部糸切で断面三角形の高台を付す。68は底部外面無釉。69は高台部内端に一条の凹線。71・72は混入品。71は暗灰色の須恵質の素地に緑色の釉薬を施した10世紀の美濃産。72は軟質の素地に淡緑黄色の釉薬を施した9世紀中頃の京都産である。



73～76は白色土器。73は無高台の椀で底部は糸切のままである。76は高杯の脚部で断面多角形に面取りしている。77は須恵器鉢。78は混入品の越州窯青磁の椀。

弥生土器（79～83）（図12、図版4）

弥生時代前期の土器である。79は頸部が長くのび、口縁部が発達して大きく外反する広口壺である。頸部にヘラ描沈線文を施す。80は外反する口縁をもつ鉢。体部の調整は板状工具によるナデ。81は甕の胴部片。外面は縦方向のハケ調整後ヘラ描沈線文を施す。82は壺の胴部。タタキ成形後、縦方向の粗いミガキ調整を施す。83は壺か鉢の底部。

図12 弥生土器実測図（1：4）

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器5点		
平安時代前期～中期	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦		土師器27点、灰釉陶器7点、緑釉陶器6点、白色土器4点、須恵器1点、輸入青磁1点、軒丸瓦5点		
平安時代後期	土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器				
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器				
江戸時代	土師器、陶器、磁器、染付、銭貨、石臼		土師器32点		
合計		30箱	88点（2箱）	28箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

(2) 瓦類 (図 13、図版 5)

平安時代中期の軒瓦は、SD 171 から 4 点 (84・86～88)、後世の遺構から 1 点 (85) 出土している。

84～86 は単弁十二葉蓮華文軒丸瓦。凹形中房で蓮子は 1 + 6。蓮弁は互いに接し、弁端は界線に接する。外区は珠文が粗く巡る。瓦当部成形は一本造り技法である。瓦当部側面上半はタテケズリ。裏面布目。胎土は砂粒を少量含み、橙色。

87 は単弁十葉蓮華文軒丸瓦。中房は平坦で圈線が巡り、蓮子は 1 + 5。蓮弁は互いに接し、弁端は界線に接する。外区は珠文が粗く巡る。瓦当部成形は一本造り。瓦当部側面上半はタテケズリ、下半はナデ。裏面布目。胎土は砂粒を少量含み、灰白色。

88 は複弁四葉蓮華文軒丸瓦。中房はやや盛り上がり圈線が巡り、蓮子は 1 + 4。蓮弁は子葉 2 つ盛り上がる。間弁は撥形。界線は弁端に対応して、内側に突出する。外区は粗い珠文が巡る。瓦当部成形は一本造り。瓦当部側面はケズリ。裏面布目で、下半部ケズリ。胎土は細砂を少量含み、灰白色。

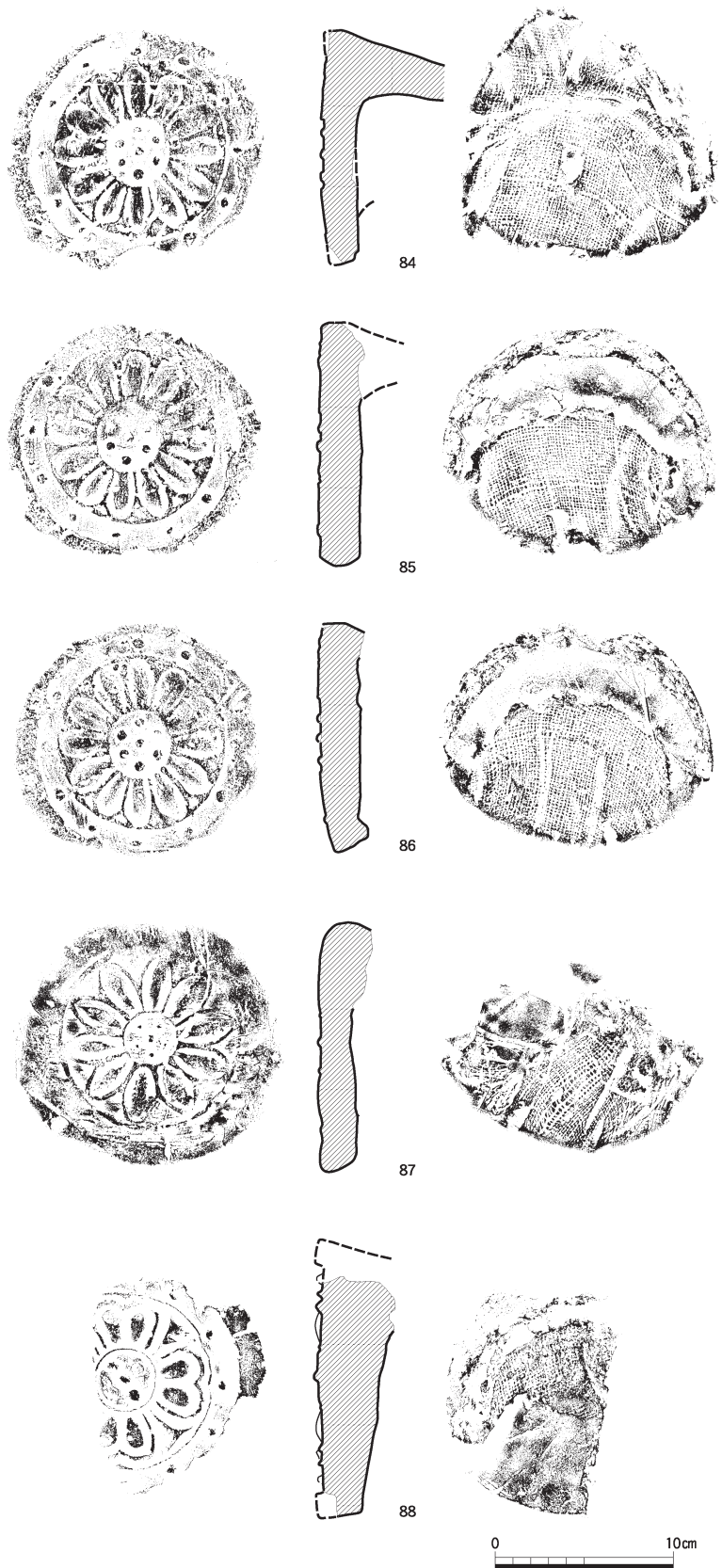


図 13 軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)

(3) 自然遺物 (図 14、表 3)

表 3 自然遺物リスト

分析対象とした土壌は、SK27 と SK55 からサンプリングした。対象量は SK27 が中間と底の 2 箇所から中間は 1.5 l、底は 2.1 l、SK55 は 2.1 l であった。SK 27 は甕が正位に据えられ便槽、SK55 は土師器皿が多量に埋納された土器埋納遺構と考えられた。土壌は 0.25 mm・1 mm・2 mm・4 mm の篩で洗浄・選別した。

番号	種類	部位	個数	備考	検出遺構
1	コムギ	果実	3	炭化	SK27中間
2	不明	孢子?	1		SK27中間
3	不明骨	大腿骨	1		SK27中間
4	魚骨	不明	1		SK27中間
5~7	昆虫	上翅	4		SK27中間
8	コムギ	果実	10	炭化	SK27底
9・10	魚骨	不明	2		SK27底
11~13	昆虫	不明	4		SK27底
14	コムギ	果実	5	炭化	SK55
15	オオムギ	果実	173	炭化	SK55
16	ヒユ属	種子	1	炭化	SK55
17	ダニの仲間		2		SK55
18	不明骨	不明	1		SK55
19	蛾の繭	繭	2		SK55

※ 番号は図14の番号に対応する

その結果、SK27 は、中間から炭化したコムギ・哺乳類のものと思われる左大腿骨・昆虫の上翅、底から炭化したコムギ・魚骨と思われるもの・昆虫の不明部

位を検出した。SK55 は、炭化したコムギ・多量の炭化したオオムギ・炭化したヒユ属の種子・ダニと思われるもの・不明骨・蛾の繭を検出した。

今回は SK55 の多量の炭化したオオムギが特筆される。

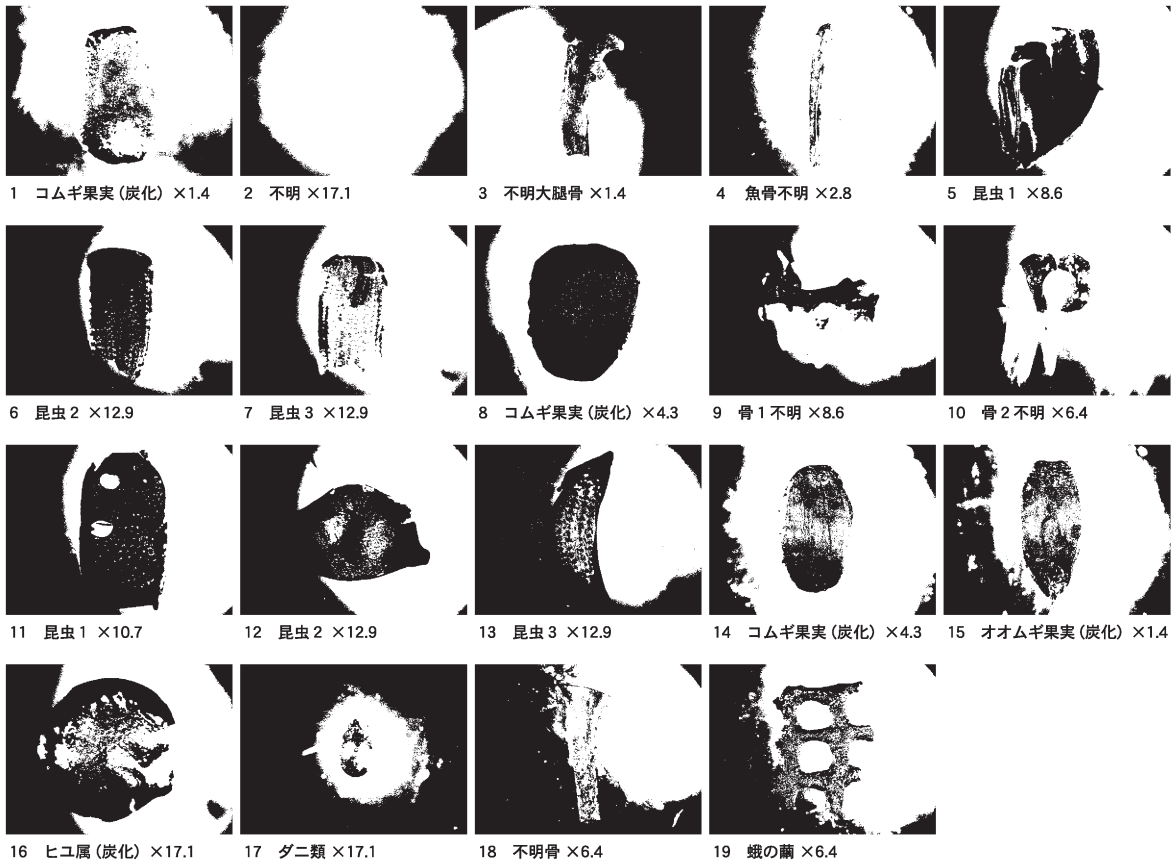


図 14 自然遺物顕微鏡写真

5. ま と め

今回は調査面積が狭いため、各時代の遺構の全容をつかむことはできなかったが、この土地における土地利用の変遷について、わずかながらも、その一端を知りうる資料が得られた。

弥生時代の遺物包含層が検出され、少量とはいえ弥生時代前期の土器が出土したことから、周辺の調査でも明らかにされているように、人間の生活の痕跡が確認できるのは弥生時代からである。調査地西隣の立会調査では、古墳時代の遺物包含層が検出され、6世紀後半の須恵器短頸壺の完形品が出土しており、弥生時代以降平安京に至るまで連綿と人々の営みが続いていたと推測される。

平安時代には、11世紀前半頃の溝（SD171）が、西二行と三行を区画する推定ライン上に位置し、土地の区画に関する遺構と考えられる。

鎌倉時代から室町時代前半にかけての遺構は、ほとんど残っていない。

室町時代後半では、現仏光寺通南端から南へ15m付近から内側で、土取り土坑が重なり合って認められ、建物の背後空間の土地利用の一端を明らかにすることができた。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうじゅういっちょうあと							
書名	平安京左京五条三坊十一町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-7							
編著者名	伊藤 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 ごじょうさんぼう 五条三坊 じゅういっちょうあと 十一町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ぶっこうじどおりむろまち 仏光寺通室町 ひがしいるくぎかくしちょう 東入釘隠町 247	26100		35度 00分 04秒	135度 45分 32秒	2007年7月 2日～2007 年8月10日	105m ²	事務所 ビル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 五条三坊 十一町跡	都城跡	弥生時代	遺物包含層	弥生土器				
		平安時代	溝、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦				
		室町時代	土坑、土取り穴など	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器				
		江戸時代	井戸、土坑、トイレ遺構、土器埋納遺構など	土師器、陶器、磁器、染付、銭貨、石臼				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-7
平安京左京五条三坊十一町跡

発行日 2007年10月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961